

## 自然農法の米は、香りがよくて 草の実のような味がするのです

自然農法に取り組んで12年、  
150人の仲間との縁・つながりが強まる

糸乗 貞喜

(よかネットNO.60 2002.11)

- 3 農業振興

コメって、こんなに種類が多いんだ……多くの人が思い思いの稲を作っている「福岡自然農学びの場」は、となりの田と様相が違っていた

田圃で松尾靖子さんから「これは赤米です、これは透明な米粒できれいです。これは緑米でとってもきれいなんです。これは香り米で、その向こうのはタイの香り米で、餅米でもあり特にいい香りがします……」と説明を聞くが、とても覚えられない。「見てください。この稲の根本は色が違ってきているでしょう。隣の稲より黒くて太いでしょう。これは自然農の稲の特徴で野生化しているのです」と言われて見ると、確かにとなりの田の稲とは違う。勿論、現在一般に行われている栽培方法で育てた、となりの田は整然と植わっていて、稲の丈も揃っている。それに引き替えこちらの稲は、丈もまちまち、色もまちまち、植わっている稲の畝も曲がっている。全く野生の田圃のようだ。

畑も見た。草の間に、このあたりでよく食べるカツオナのような、葉ものが元気に育っている。しかし一般の農家の人から見ると、草だらけでいかにもだらしない畑に見えるに違いない。しかし、この畑に立つと、何となく気持ち气和んでくる。

松尾靖子さんは、子供のようなキラキラした、好奇心にあふれた目をした人である。もちろん、自然農に取り組んでいる福岡のグループの創始者であり、九州から初めて奈良の川口由一さんのところへ学びに行った人である。まぎれもないリー-

ダーであり中心人物なのだが、そういう雰囲気は全く感じられない。このグループの人たちは、どの人と会っても組織の雰囲気がしない。

自然農法とは、耕さず、草や虫を敵とせず、肥料を必要としない、生命(いのち)の理に沿った、他の命と共存し合う農のこと

かなり過激な言葉である。私も週末農業(二農ハサラ)に取り組んだが、草に追いかけて強迫観念にとらわれた。梅雨などの雨の多い季節など、近所の農家から苦情が出やしないか、気が気ではなかった。ついに腰を痛めて、今は止めてしまっている。その時の事を思うと「草は敵とせず」といって草の中から里芋がのぞいていたり、草の中に野菜が座っていたりすると、変な気になる。これだけ過激な理念を持ちながら、この人たちのつながりは“ゆったり”している。

自然農自体が、農作物の持つ生命力を信頼した農法のように思う。それと同じようにこの人たち全員が、自分でやりたいことを進んでやっている(ボランティア)だけのようだ。それでいて、全国に「自然農学びの場」が広まっている。

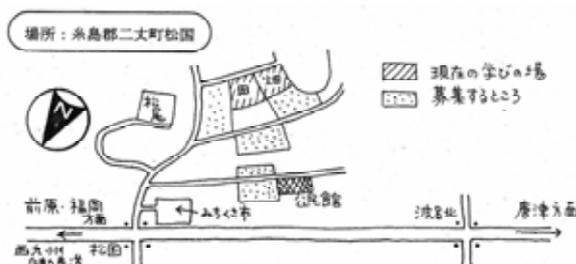
この人たちの“つながり方”は、ヨコ型社会の典型のようだ。この農法の創始者である川口さんという人は、呼ばれたら教えに行くが、決して教祖のような雰囲気はない。どのグループ間も指導とか教育するというような関係はなく、どんどん訪ねたり集まったりして、学んでしまうように見える。

このツリー型ではなくアメーバ型の連携は、この農法が、大規模経営や機械化などによる量産システムになじまないからに違いない。

その中で、松尾さんが一番楽しんでいるように見えた。

OLの頃はクワもカマも持たなかったことがなく、百姓だけはしたくないと思っていた

松尾靖子さんは1954年(昭和29年)生まれて、



図表1 松尾ほのぼの農園の所在地

若い頃はOLをしており、登山に凝っていた。「槍ヶ岳にも登ったんですよ」と、自慢げに言われた。父はコメの品評会では県下で1～2位を取るぐらいの篤農家であったが、自分は百姓はしたくないと思っていた。

1979年、縁があって、この二丈町松国の松尾さんと結婚され、「主人と二人で慣行農法（農薬を使い、化学肥料をやる農業）による農業を始めた」が、旨くいかなかった。夏はスイカ、冬は白菜、レタスをやり、ぶどうを30アール作った。ブラックオリンピアというぶどうは、高級品種で、成功させて毎年海外旅行に行く予定だったが、近くの温泉にも行けず見事に失敗した。鉄骨で屋根をつくり、ビニールをはったり、寒冷紗をはったりし、資材と手間ばかりかかり、水管理も難しく大赤字を作ってしまった。

主人との農業は全く楽しくなかった。人生を間違えたのではないかと悩んだ。

ひとりで百姓をやることになり、有機農業に取り組む

1980年に主人は腰を痛めて、農業はやれなくなってサラリーマンになり、靖子さん一人で百姓をやらねばならなくなったが、どんな農業をやったらいいか悩んだ。そしてギックリ腰になった頃に、有吉佐和子の「複合汚染」、福岡正信の「自然農法」に出会った。「家族、子供に本物を食べさせたい」というのも有機農業へ転換する動機になり、無農薬野菜に取り組むが、最初の年のキャベツはレース編みのようになった。三年間ほどは出荷できるような野菜は育たなかったが、土が少しずつ変わっていった。

1983年に福岡有機農業研究会に入会した。このころから自然食品の店や生協の青空市に野菜をを出荷できるようになるが、「小遣い稼ぎ」程度だった。結局この有機農業はかなり成功し「経済的には良かった」のだが、夜中の一時頃まで残業を



自然農でつくった稲のなかで見学者に説明する松尾靖子さん



緑米やタイの香り米もある



草と共存する野菜

したりして過労になり、楽しいどころか辛い日々になった。ピーク時には100人の顧客がついていたということだから、収穫、荷造り、出荷を続けるのは大変だ。「経済的には良かったんですが」身体が続かなかったのである。

1989年に、龍国寺で見せてもらった“80年代”という雑誌の中の川口さんの稲の写真を見て「私が探していたのはこれだ」と思った。1990年2月、当時志摩町から援農に来てくれていた友人と二人で、奈良の川口さんのところへ出かけた。「土は軟らかくスポンジのようで、ふわふわしていたし、畑から取った小さい蕪をもらって、そのままかじったらとてもおいしかった」ということで、完全

に川口さんの農法に吸い込まれていく。

最初で最後のつもりで、奈良の川口さんのところへ行ったが、あと五回、一年間奈良に通うことになる

私は少し意地悪く「姑さんにどうお願いしたんですか。子供さんはいくつだったんですか」と尋ねた。

「どうしてもあと五回の二ヶ月おきの講習会に行くこと決めてしまったんです」

「で、姑さんにはどう言ったんですか。子供さんはどうしたんですか」

「嫁が奈良へ行くのは、今の感じでは海外旅行へ行くようなものでした。子供は長男、次男、長女と、10才から5才の三人いました。その子を姑に見てもらわねばならないんです。姑はとってもいい人だったんですが、この田舎ではそんな身勝手は許されません」

「それでどうしたんです」

「早くから予定を言っても、とても許されるようなものではないので……」

「それで……」

「奈良の講習会に行く前の日まで黙っていて、“明日奈良に行かしてもらいます” “子供をお願いします” と言ったんです」

ここで私は爆笑した。「確信犯ですね」。

「で、次はどうしたんです」

「あと四回、同じように言ってお願いしました。でも、それより仕方がなかったんです」

確かに“さもあらなん”ではあるが、この松尾靖子さんは目がキラキラして、童顔で優しい顔をしているが、なかなかどうして芯が強い人だと思った。

川口さんの自然農法に出会う

雑誌で見た川口さんの自然農の稲の姿にほれたことは、すでにふれた。それを学ぶために、一年間通った。行き帰りは夜行バスで、奈良に一泊

して、三泊二日の旅だった。夜行バスにしたのは、旅の時間を減らして迷惑をかけないためである。

川口さんは、福岡さんの「わら一本の革命」に感動して自然農を始めたのだが、なかなか旨くいかなかった。福岡さんの考えは哲学的で、世界的にも有名な人であり、“無為自然”という考えに立っていた。福岡流では草に負けてしまうのだ。実際の農家である川口さんは、福岡さんの考えに現実の農家としての考え = 栽培と言うことを取り入れた。「放任ではだめで、草に負けないように、はじめは少し手を貸す」と言うものである。つまり実際の百姓としての工夫を加えたのである。

この農法に転換するに当たって、松尾さんはまず、有機農業の作物を買ってくれていた顧客に断って、有機農業を減らし始める。約百戸のうち、北九州に送っていた60~70戸を断って、自然農に手を着け始める。松尾家の畑は他に貸してしまっていたので、唐原と言うところに学校の先生をしていた人と二人で、二反の畑で始めた。二年目にはクチコミで、そこに60人の人たちがやってくる。 “自然農の学びの場” になっていった。

しかし地主さんが、畑が草だらけだったので、荒らしていると思って、「返せ」と言われた。また、60人が一カ所に集まるというのも、ガソリンまき散らして来るわけで、自然農に反するので、今では、福岡のグループは4箇所になっている。

城南区	15人
東区	8人
二丈町(松尾ほのぼの農園)	50人
同(一貴山)	10人

自然農法で食べていけるんですか

「農薬もやらず、肥料もやらないで、どれくらい穫れるのですか」とたずねたら、「慣行農法の七掛けくらいは穫れますよ」と松尾さんはいった。現在自然農の野菜を、配達したり宅急便で送

## 全国の自然農学びの場

各地に自然農の学びの場が広がっています。それぞれの場所で定期的にまたは年に何回かの学習会が開かれ、川口さんが指導されておられます。お近くの方はお問い合わせください。



っているお客さんが20戸で、三カ所の自然食品の店にも出している。おおよそ30戸分である。一戸6,000円か8,000円として考えると、サラリーマンの初任給程度で、「心にストーンと落ちた人ではないとなかなか続けられない」農業ではある。

しかしそれほど悪いとはいえない。農機具が要らない。耕さないのだから。もちろん燃料も要らないし、農薬や化学肥料も要らない。

ということは、逆に言えば、大規模化できない農業だということである。

この農業の要領を述べると、農作物が若い頃は、草ののびより遅いので放っておくと草に負けて隠されてしまう。「草に作物が埋もれそうになったら、草の根を残して刈ってやります。その時も、作物の片方は刈っても、半分は残すのです。虫は草の方が好きですから」という態度で、虫との共存をはかる。また土地の状況や作物の状況を見て、灰をやったり、油粕や米糠を“おぎなう”。意外と柔軟な営農姿勢で、単純なピューリタンではない。

私の感想を言うと、「七掛け」の収穫があるなら、減反をやめれば日本の収穫は減らないことになる。化学肥料や農薬をやめれば石油の消費が減るし、健康にもいい。大規模化できないのは、工業社会のシステムから見ると欠陥ではあるが、現在の工業型農業で雇用を押しさえているのが、絶対の善だともいえない。画一型の、どのように作られたのか分からないような農作物では、輸入物と区別がつかない。

そもそも現代の日本人の食生活は、エンゲル係数が低すぎるのではないかと思う。逆に小型農業やサラリーマンの兼業農家を増やすことによって、現在減反対象になっている小規模農地をよみがえらせることになる。

自然を征服の対象とせず、程良く利用させてもらおうという“自然農法”は、21世紀の地球を救う農業

### かもしれない

松尾さんたちは、一般の人にこの農法を伝えるために、「福岡自然農塾」という催しをやっている。今年で22回になり、千人以上も集まる。川口さんの講演や、自然農法による川口さんの田畑の記録映画などもある。

その中の200～300人が、実際の畑に出かけて見学実習もやっている。こんな松尾さんの所には、日本だけでなく、海外からも尋ねてくる人がいる。今年の春にはアルゼンチンの青年が来てホームステイした。彼は骨肉腫になったのが、玄米食で好くなったと言って、日本に来て九州の南から北へ回ってきた。自然農派だんだん広がっているように見える。